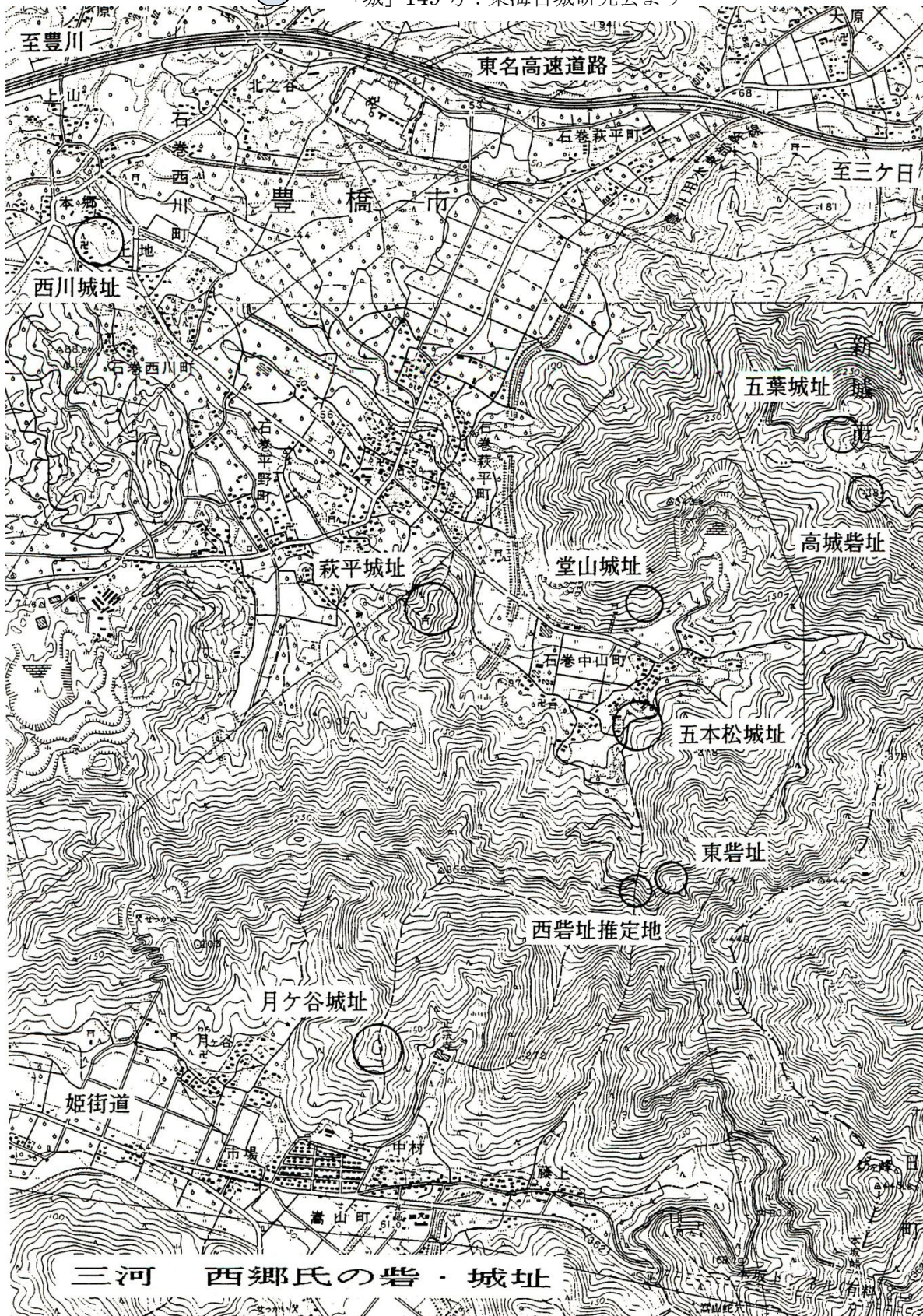


五葉城の位置

「城」149号：東海古城研究会より



五葉城ってどんな城？

五葉城ごようじょうは、富岡西部の五葉湖の南にそびえる標高340mの山頂にあり、五葉湖畔から歩いて1時間近くかかる高所にあります。五葉城は新城市と豊橋市との境界に位置しており、八名郡南部の西郷わちがや（石巻中山町）と月ヶ谷すせ（嵩山町）の一円を領した西郷氏の山城と考えられています。

戦国期、西郷正勝は駿河の今川義元するがに仕え、天文16年（1547）、今川軍の東三河から西三河への軍事行動とともに、西郷谷が駐屯基地となっていました。しかし、永禄3年（1560）の桶狭間での義元戦死にともない徳川家康に属したため、永禄4年（1561）には今川氏真家臣うじざねの朝比奈泰長やすながに攻められ、正勝・元正父子は討ち死にしました。この時、西郷氏と縁戚関係にある野田城さだみつの菅沼定盈が逃れて、西郷の「高城」たかつき（五葉城）とりでに砦を構えたことが知られています。

五葉城は高城砦址たかつきが隣接しているため、別称として高城たかつきとしたり（参河名所図絵）、高城を別の城としたりした（浅野文庫蔵「諸国古城之図」）記述もありますが、機能的に一体化した城といえるようです。本来の大手道は、「諸国古城之図」に南方の西郷谷方面から登城する「七曲坂大手口」とあり、西尾根の曲輪（堀切部）に入るように描かれています。

五葉城のある地点の近くには宇利峠と中山峠とおとうみのくにいなさがあり、遠江国引佐郡とつながっています。五葉城の利点は、宇利峠と中山峠越えをおさえ、北方の宇利地域を見下ろし監視できる位置にあることです。そのため、今川期の西郷・菅沼氏よりも永禄8年（1565）以降、家康の遠江侵攻から武田氏の三河侵攻にともない、家康の手により築き上げられ陣城として機能、運用されたと考えられています。

<参考>

- ・新城—文化財案内
- ・愛知の山城ベスト50を歩く
- ・「城」149号：東海古城研究会



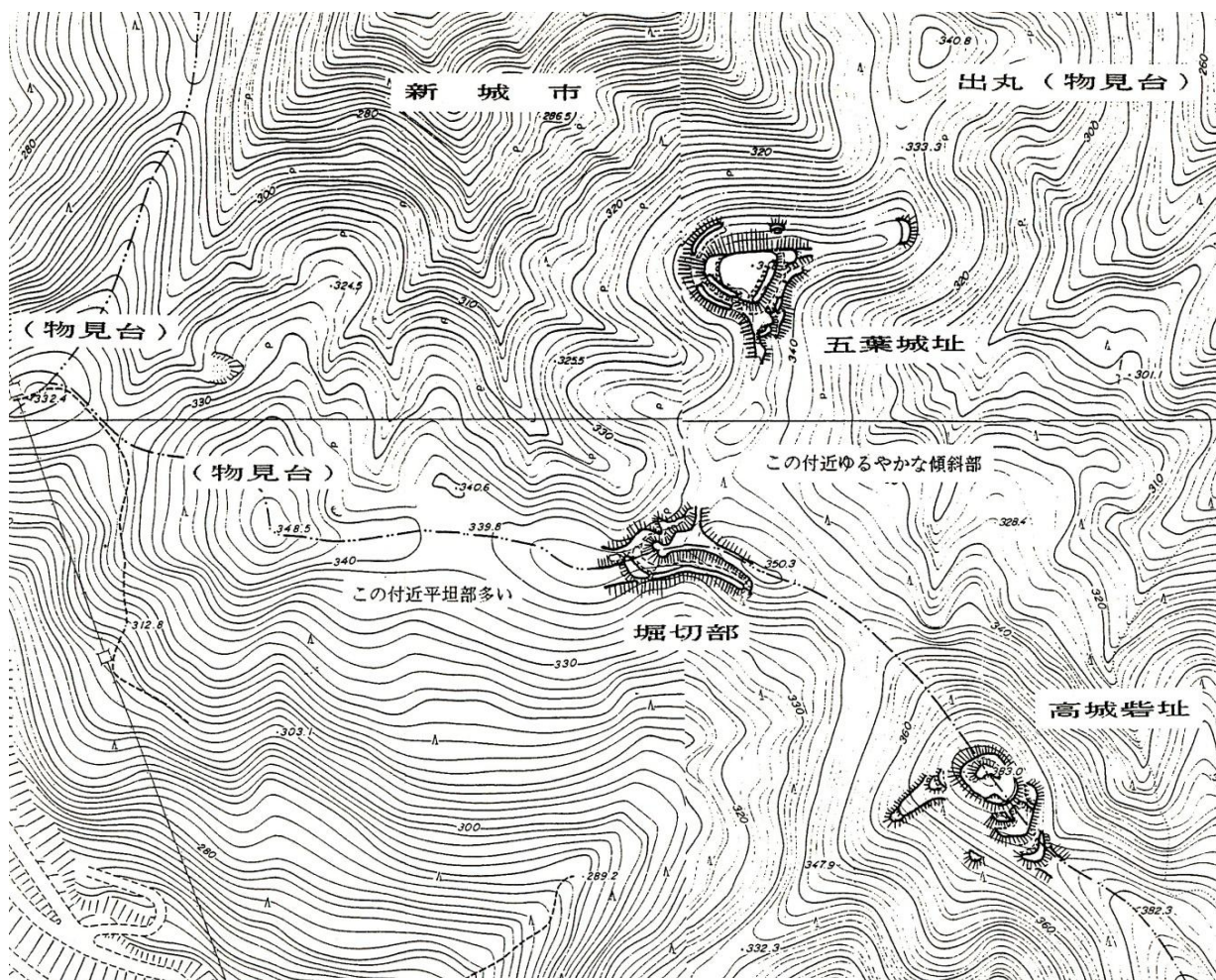
五葉城址

五葉城のつくり 1

創建は南北朝時代との説もありますが、明らかではありません。1561年（永禄4）、野田の戦いで今川方に追われた菅沼定盈すがぬまさだみつが高城砦を築いたといわれています。

全体の遺構としては4ヶ所に分かれています。機能的には一つの城と考えられます。五葉城址の一の曲輪はほぼ三角形で、東西35m、南北は14m～28mで北側は絶壁、東・南・西に低い土塁と空濠からぼりがあり、南に一段低く、10m四方の二の曲輪、さらに南100mの尾根に堀切と南東300mに高城砦及び北東に出丸たかつきとりがあります。

出丸に立てば、野田城方面（直接は見えない）、宇利城方面、一宮方面等への眺望がききます。高城砦は五葉城より約30m高いため、五葉城周辺の物見的役割と南東より尾根伝いに来る敵に備えることを担っていたようです。中間に位置する堀切部は、両方の尾根伝いに来る敵に備えるとともに、城・砦の接点としての役割と五本松城への連絡を担っていたものと思われます。



「城」149号：東海古城研究会より

五葉城のつくり 2

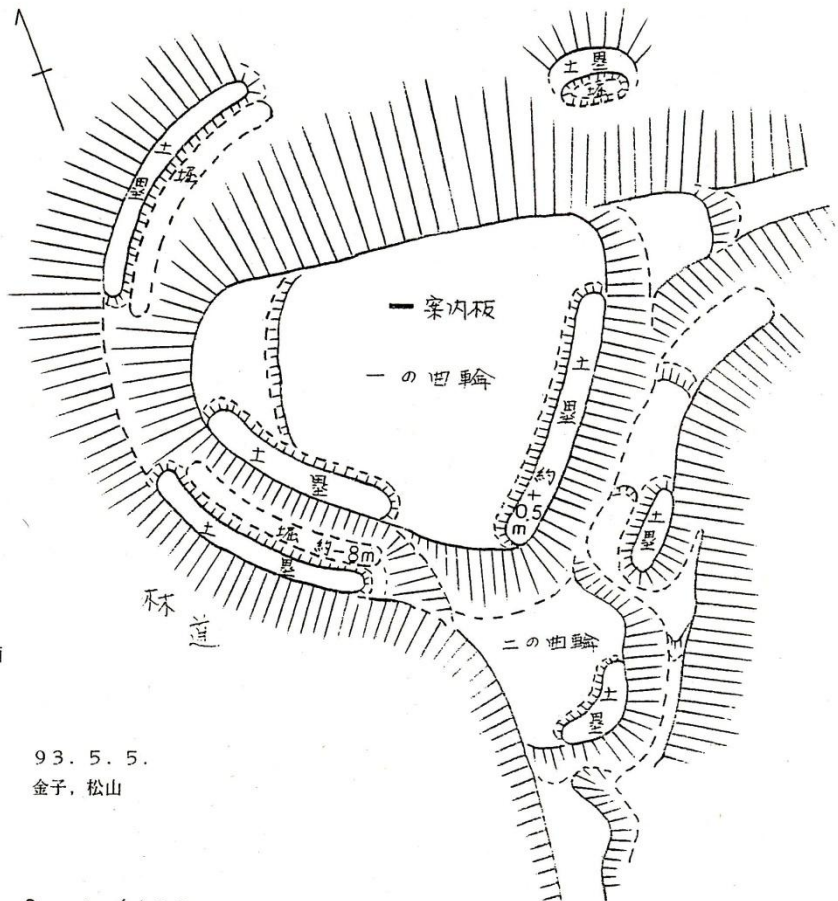
五葉城址の略測図から分かるように、一の曲輪が一番大きく三角形に近い形になっています。二ヶ所にはっきり分かる土塁が残っています。南西側土塁の下側の空堀はよく残されています。本丸への虎口としては、南・西・東にあったようです。特に南側面は、一の曲輪、二の曲輪への入り口に設けられ、二重の関門になっていて、よく活用された虎口と思われます。さらに、曲輪を囲うように土塁と横堀が見られ、防衛機能を高めています。

なお、この城址には井戸は見当たらず、水は谷川より入手したと思われます。また、堀を利用して雨水をためたことも考えられます。二の曲輪から南へのびる部分は、林道により破壊されたため確認できなくなっています。



一の曲輪南西側の土塁と空堀

五葉城址略測図



注) 土塁の高さ、堀の深さは、一の郭面よりを示す。

調査日: 93. 3. 21.

参加者: 金子, 高橋, 前川, 永田, 松山

製 図: 松山

93. 5. 5.

金子, 松山

0 10m 20m

S = 1 / 400

「城」149号: 東海古城研究会より

たかつきとりで

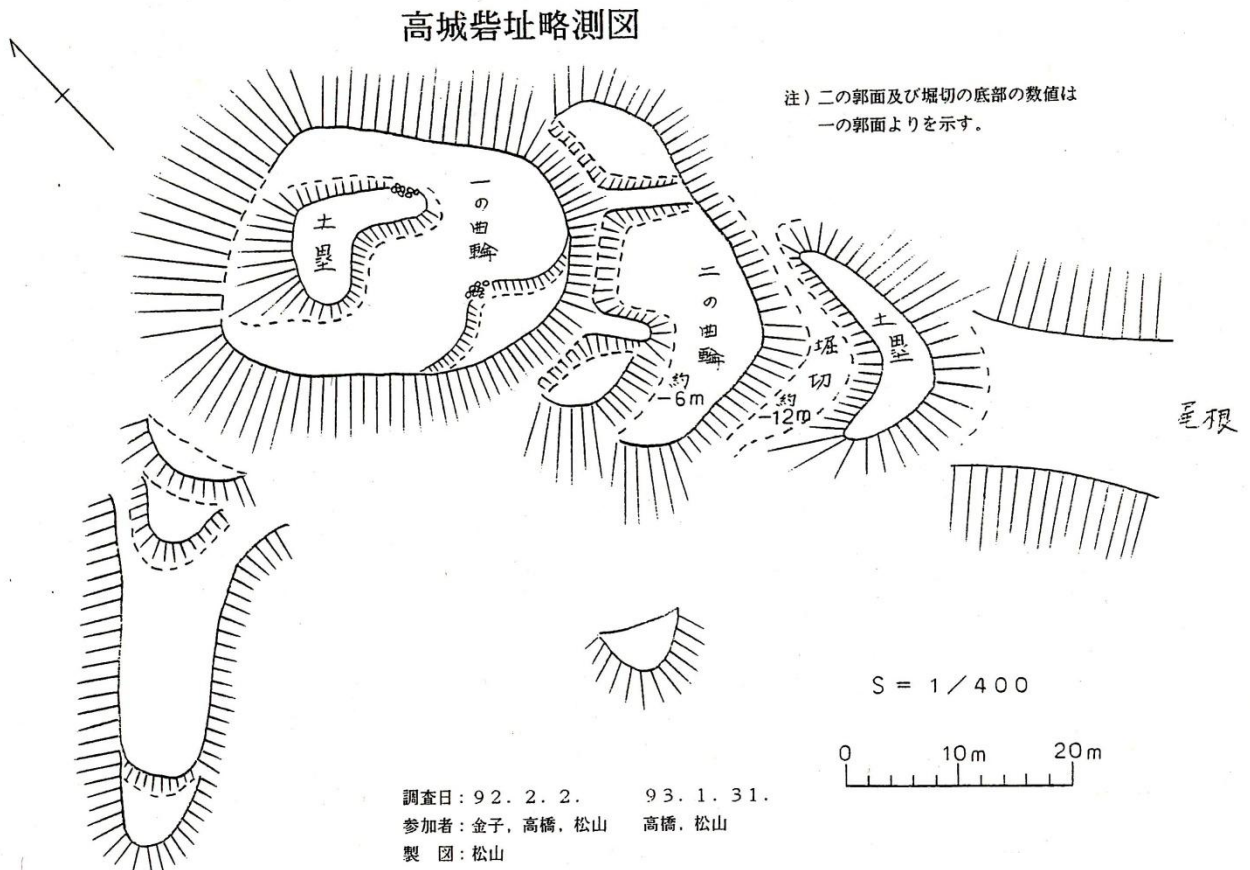
五葉城（高城砦）のつくり 3

高城砦は、尾根を利用して造られています。一の曲輪は標高383mあり、五葉城より約30mほど高くなっています。それほど大きな砦ではありませんが、一の曲輪と二の曲輪とで約6mの高低差をつけています。特徴としては、一の曲輪と二の曲輪の間に2本の土塁を配してあり、通路面の機能と、土塁の間の空間は、倉庫等に利用したと思われる機能を持っています。二つ目の特徴は、大きな堀切です。一の曲輪からは、約12mの高低差があり、見ごたえがあります。南東からの尾根筋の敵に備えたものです。



堀切から二の曲輪へは6mの高低差

- <城のつくり参考資料>
- ・「城」149号：東海古城研究会
 - ・愛知の山城ベスト50を歩く
 - ・新城 文化財案内



「城」149号：東海古城研究会より

西郷氏に関わる年表

<参考> 豊橋市史，八名郡誌，東三河の戦国時代

年 代	で き ご と
1529年（享禄2）	宇利の戦い 松平清康，東三河を勢力下に入る。
1535年（天文4）	守山崩れ 松平清康が家臣に討たれる。
1537年（天文6）	戸田氏，吉田城を奪取。
1549年（天文18）	松平広忠没 今川義元が三河を平定 諸将今川方につく。
1560年（永禄3）	桶狭間の戦い 今川義元討死。
1561年（永禄4）	西郷正勝，菅沼定盈等，松平につく。 今川方の吉田城主，小原鎮実 <small>おはらしずさね</small> に攻められ， 定盈 野田城を明け渡し， 西郷に退く 。 高城に砦 を構える。 今川方の朝比奈泰長 <small>やすなが</small> が五本松城を攻め， 正勝・元正父子が討ち死に 。次男の清員 <small>きよみん</small> が本領を取り返す（仇を討つ）。
1562年（永禄5）	定盈，野田城を奪い返す。松平・織田が同盟。
1563年（永禄6）	元康が家康と改める。
1564年（永禄7）	家康，吉田城を攻め，開城させる。
1568年（永禄11）	定盈，家康の遠州攻めで中宇利に入る。先鋒として刑部 <small>おきかべ</small> （引佐）を攻略。家康，遠州の各地を攻略し勢力拡大。
1569年（永禄12）	山家三方衆，武田信玄に属す。
1571年（元亀2）	武田の侵攻があり， 西郷義勝が竹広表の戦いで討ち死に 。 定盈，信玄に攻められ 西郷に退く が，野田城修復後戻る。
1572年（元亀3）	信玄，遠州へ出陣。家康，三方ヶ原で敗れる。
1573年（元亀4）	信玄，野田城を攻め開城させるも甲府への帰途，死亡。
1574年（天正2）	山県昌景 <small>まさかげ</small> が西郷に侵入，家員 <small>いえかず</small> ，定盈とともに撃退。
1575年（天正3）	長篠・設楽原の戦い 家員は酒井忠次に属し定盈とともに鷹ヶ巣攻めに加わる。
1578年（天正6）	お愛の方 ，徳川家康に召され浜松城に上り側室となる。
1579年（天正7）	お愛の方 ，西郷の局 <small>つぼね</small> と称され2代将軍となる 秀忠 を産む。
1580年（天正8）	西郷の局 ，忠吉 <small>ただよし</small> （尾張の清洲城主となるも若死）を産む。
1590年（天正18）	家員，家康関東移封の際，下総国 <small>しもうさのこく</small> （千葉）で5千石を賜る。

西郷氏と菅沼氏

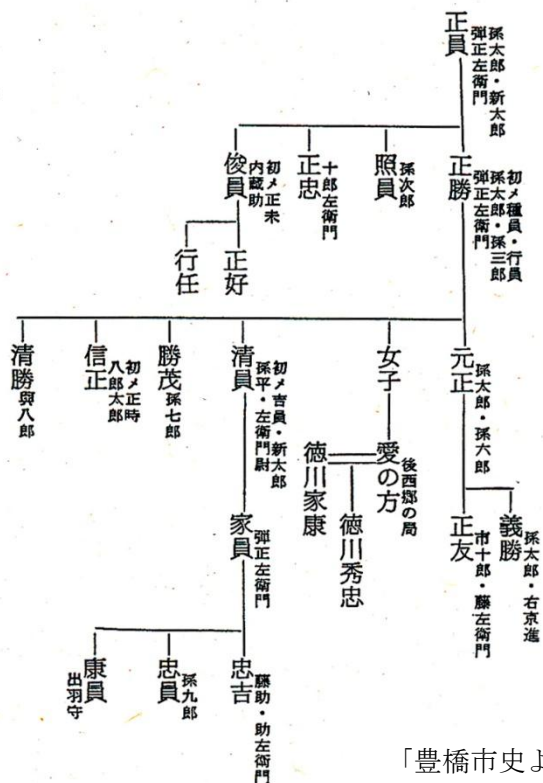
西郷氏と野田の菅沼氏は姻戚関係にあり、互いに支え合って戦国時代を生き抜いています。西郷正勝に嫁ぎ、元正、清員を産んだのは野田城主菅沼定則（定盈の祖父）の娘です。したがって元正、清員兄弟と定盈は従兄弟関係になります。

西郷正員は、松平清康に従い、宇利の戦いでは菅沼定則とともに先陣として軍功をあげたとされています。しかし、松平勢の後退、今川氏の東三河進出のためやむなく今川氏につきまします。正員没後、正勝が継ぎ、今川方に属しました。その後、西三河において松平元康の勢力が強大になってくると、西郷正勝はじめ、野田の菅沼定盈、田峯の菅沼定忠等が松平に従いました。この時、次男の清員は人質として岡崎に送られました。さらに、長篠の菅沼氏、作手の奥平氏等が続々と元康につくと、今川氏真は大いに怒り、当時吉田城内にとめおかれた諸将の人質13人を殺害してしまいます。正勝、定盈の妻も含まれていました。

永禄4年（1561）、吉田城の小原鎮実は今川に背いた諸将を討つべく、野田城の菅沼定盈を攻撃しました。五本松城にいた西郷正勝は、長男の元正を送り、定盈を助けたが、こらえきれず城を明け渡して西郷に退きました。西郷に退いた定盈は、高城に砦を構え、正勝も中山の堂山に砦を構えました。さらに鎮実は、西郷の定盈と正勝を攻めるもなかなか落とせず、正勝は五本松に築城して移り、元正に嵩山月ヶ谷城を守らせました。

しかし、今川方の朝比奈泰長が五本松城に夜襲をかけます。不意を突かれた正勝は苦戦に陥り、月ヶ谷に帰る途中の元正が引き返しましたが、衆寡敵せず、正勝・元正父子は討ち死にしました。この後、元康のもとにいた次男の清員は仇を討とうと願い出て、元康から兵を得て、本領を取り返しました。

しかし、清員は元康の命を固辞し、亡兄の子義勝に跡を継がせました。



「豊橋市史より」

竹広表の戦いと西郷の局

わちがや 月ヶ谷城主の西郷正勝は五男一女をもうけましたが、その一女が戸塚忠春とづかただはるに嫁いで産んだのが通称「お愛の方」です。お愛が生まれて2年後に忠春は討たれて亡くなります。母は幼い「お愛」をつれて実家にもどり、今度は服部正尚まさなおに嫁ぎます。その家で成長したお愛は、西郷正勝の孫(元正の子)で西郷家を継いだ従姉妹の義勝よしかつに嫁ぎ、一男一女を産みます。

しかし、義勝は元龜2年(1571)、竹広表たけひろおもての戦いで戦死します。信玄が遠江、三河への侵攻をはかり、武田氏配下の秋山信友やまがたまさかげ、山県昌景が三河に侵入。縁戚である菅沼定盈さだみつの要請を受け、竹広において合戦に及びました。定盈、西郷清員等きよかずの奮戦により秋山信友の武田軍を一時的に退けることに成功しましたが、義勝はこの戦いで命を落としてしまいました。

西郷家にもどったお愛は、7年後の天正6年(1578)春に、叔父にあたる清員きよかずの養女として徳川家康に召されます。浜松城に上り側室となり、西郷の局とよばれます。そして翌年天正7年(1579)4月、2代将軍となる秀忠を産むのです。また、天正8年(1580)には松平忠吉ただよし(後に尾張清洲52万石)が産みました。西郷の局は天正17年(1589)、家康が京都滞在中に駿府城で38歳で逝去しました。竹広の戦いがお愛の運命を大きく変えることになったのです。

西郷家は、義勝よしかつの死後、清員きよかずの子家員いえかずが継ぎました。武田氏との抗争が佳境をむかえる天正2年(1574)、武田勝頼の家臣山県昌景まさかげが西郷に侵入した折、家員いえかずは菅沼定盈とともにこれを撃退しました。

家員いえかずは、天正3年(1575)の長篠の戦いでは、酒井忠次に属し、定盈とともに鳶ヶ巣攻めに加わっています。

その後は家康に従い、天正18年(1590)関東移封の際、下総国しもうさのこく(千葉)で5千石を賜り、家員まさかずの子正員は1万石の大名になっています。



西郷の局 (お愛の方)

<参考資料>

- ・豊橋市史
- ・八名郡誌
- ・古城の風景
- ・東三河の戦国時代

西郷の局ってどんな人

<ウィキペディアより 分かりやすく部分修正>

西郷局（さいごうのつぼね） 天文21年（1552）～天正17年（1589）

戦国時代・安土桃山時代の女性。戸塚忠春の娘という。通称お愛の方。徳川家康の側室として知られ、最愛の側室だったともいわれている。院号は竜泉院，宝台院。

三河西郷氏は、現在の豊橋市西郷校区辺りに本拠を置いていた。2代征夷大將軍徳川秀忠生母西郷局（名は愛）を出した外祖父・西郷正勝の頃には、三河での影響力は今川義元の傘下で命脈を保っている程度にしか過ぎなかった。母は今川氏の命であろうか、遠江国の戸塚忠春に嫁いでいる。

成長して最初の夫に嫁いだものの、先立たれて寡婦となっていた。そこを、同じく正室に先立たれた従兄・西郷義勝の継室に望まれたという。義勝との間に一男一女をもうけている。一説には義勝が最初の夫であるとも言われる。

元龜2年（1571），武田氏の先遣，秋山信友（虎繁，晴近）の南進を阻むため，縁戚の野田菅沼氏に協力した竹広合戦で，義勝が落命する。またしても未亡人となったが，彼女の産んだ男子は幼過ぎて家督が継げなかった。

やがて母の弟，西郷清員の養女として徳川家康の側室に望まれ，江戸幕府第2代將軍徳川秀忠，松平忠吉の生母となった。しかし，天正17年（1589）に38歳の若さで死去した。死後の寛永5年（1628）になって，正一位が贈られた。

西郷局は美人で，また温和誠実な人柄であり，家康の信頼厚く，周囲の家臣や侍女達にも好かれていた。また強度の近眼であったらしく，とりわけ盲目の女性に同情を寄せ，常に衣服飲食を施し生活を保護していた。そのため西郷局が死去すると，大勢の盲目の女性達が連日，寺門の前で彼女のために後生を祈ったという。なお，不確定ではあるが西郷局の死因は，罪が不確定のまま殺害された家康の正室築山殿に仕えていた侍女の殺害，毒殺という説もある。

秀忠の異父兄に当たる彼女の残した男子は徳川頼宣（紀州徳川家）付けになるなど，西郷一族は秀忠の治世で優遇される。しかし，秀忠が家康ほど長命でなかったため，その栄華は極めて短かった。叔父・清員の家系が，安房国東条藩の大名に取り立てられたのが最高である。ところが時代が流れて綱吉の頃には勘気を被って大名の座から転落，5千石の旗本となっている。6代將軍家宣の頃に1万石に回復するが，その5千石もいとも簡単に失い，元の5千石に戻ったといわれている。

（文責：八名郷土史会 安形茂樹）